

ディスカッション「産地と語る”明日の静岡茶”」

(公社)静岡県茶業会議所 JA 経済連

1 目的

近年の高価格帯のリーフ茶の消費の減少や担い手の高齢化などにより、一番茶を主体に経営を行ってきた本県茶業はかつてないほどの厳しい局面に立たされている。本県茶業を早急に立て直していくためには、生産者のみならず、流通・販売業者、茶業団体、行政などが、現状の課題をまずは共有し、その課題解決のための具体的な取組を早急に見出し、それぞれの役割を明確にして主体性を持って実践していくことが必要である。

2 内容

(1) 開催時期・場所

開催日 平成 30 年 7 月 25 日(水) 13 時 30 分～16 時
開催場所 茶業会館(静岡市葵区北番町 81) 4 階会議室

(2) 出席者 生産者 6 名 流通・行政・団体 6 名 オブザーバー 3 名 事務局 4 名

(3) ディスカッション結果(抜粋)

ア 生産・流通・販売 産地からの課題

(ア) 生産者の意見

- ・高齢化、担い手不足により、組織変更(株式会社化)を検討するが、生産者個々の思いが強く、ひとつでまとめられない。法人化に向けて、現状では、困っていないので、困る状況にならない限り進まない。
- ・機械化や基盤整備が進み、コストの低減を図っているが、生活の基盤である一番茶が厳しい状況である。
- ・製茶機械の更新が進まない。補助金申請するにも需要の数値目標が必要で、茶価の低迷により、数値目標がクリアできない。

(イ) 流通・行政・団体の意見

- ・国や県へ要請依頼を図る場合、茶は嗜好産業であるので、補助できる内容も主力のお米と違い、効能・機能が健康長寿社会への一助になるような発想が必要、要望も具体的に。
- ・生産者と茶商のマッチングが必要、お客が何を求めているのか情報収集不足。
- ・上の茶が売れないのではなく、選択買いされ、そこに外れてしまった茶は厳しい。
- ・茶商としては、努力しなくても必要な茶が手当てできる。
- ・鹿児島県のある組織は、全て共同経営で、自分の畑の管理は他人に任せている。機械も共同摘採でやっている。収入も多く、各貯金を数値目標にして組合を組織している。若者の参入は、どのくらい儲けられるのかが必要なので、数値目標は必要。

イ これからの課題

(ア) 生産者の意見

- ・一番茶の価格が崩れているのが、全体的な茶業の大きな問題で、一番茶の良さがわかる人を多く作りだすことが課題。
- ・ニーズの合った茶の製造は必要ではあるが、一番茶のリーフの茶作りにこだわりたい。

(イ) 流通・行政・団体の意見

- ・一番茶のリーフ茶、急須で飲む人が減少、60 歳以下は急須のない家が多くなっているため、一番茶の需要が減っている。
- ・茶商の繰越在庫が大きく影響して、価格帯の需給バランスがくずれている。生産が消費と比べて供給過多ではないか。